

リリースノート (10.5.0.1)
2021 年 6 月

© 著作権 Informatica LLC 2021

はじめに.....	2
システム要件の確認.....	2
サポートの変更.....	2
インストールおよびアップグレード.....	3
アップグレードの方法.....	3
サービスパックファイル.....	3
サービスパックファイルのダウンロード.....	4
Input.properties ファイルの更新.....	4
特定のコンポーネントへのサービスパックのロールバック.....	5
インストーラの実行.....	6
インストール後の手順.....	7
アナリストサービスのインストール後の手順.....	7
Data Privacy Management のインストール後のタスク.....	7
Python トランスフォーメーションのインストール後の手順.....	9
Enterprise Data Catalog のインストール後の手順.....	11
10.5.0.1 に統合された緊急バグ修正.....	12
10.5.0.1 の修正された問題と実装された拡張要求.....	12
Data Engineering 修正された問題 (10.5.0.1)	12
Data Privacy Management 修正された問題 (10.5.0.1)	12
ドメインの修正された問題(10.5.0.1).....	13
Enterprise Data Catalog の修正された問題 (10.5.0.1)	13
Enterprise Data Preparation の修正された問題 (10.5.0.1)	16
10.5.0.1 の既知の問題.....	16
Data Engineering 既知の問題 (10.5.0.1)	16
Data Privacy Management 既知の問題 (10.5.0.1)	17
Enterprise Data Catalog の既知の問題 (10.5.0.1)	17
サードパーティ製品に関する既知の問題 (10.5.0.1)	20
Informatica グローバルカスタマサポート.....	20

はじめに

Informatica 10.5.0.1 は、複数の緊急バグ修正、制限された機能、既知の問題、およびバグ修正に関する情報を含んだサービスパックです。

このサービスパックは、Informatica Data Quality とすべての Data Engineering 製品、Data Security 製品、および Data Catalog データカタログ製品をサポートしています。

Linux 用のサービスパックは、[Informatica Network](#) からダウンロードできます。

注: 更新された機能がガイドに含まれていない場合でも、製品ドキュメントはメジャーリリースごとに更新されます。更新された機能がガイドに含まれている場合にのみ、サービスパックと HotFix の製品ドキュメントが更新されます。サービスパックまたは HotFix のガイドが見つからない場合は、以前のバージョンを参照してください。

システム要件の確認

使用する環境がオペレーティングシステムや Hadoop ディストリビューションなどの最小システム要件を満たしていることを確認します。

それぞれのリリースごとに、非ネイティブディストリビューションおよびディストリビューションバージョンに対するサポートが追加、保留、削除される可能性があります。保留されていたバージョンのサポートが将来のリリースで再開される可能性があります。

サポートされるバージョンの最新リストを確認するには、Informatica カスタマポータル (<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>) の製品可用性マトリックスを参照してください。

サポートの変更

バージョン 10.5.0.1 でのサポートの変更については、この節を参照してください。

保留

バージョン 10.5.0.1 では、Cloudera CDH 6.3 の保留が解除されました。

追加のサポート

バージョン 10.5.0.1 では、Informatica Data Quality でインターネットプロトコルバージョン 4 (IPv4) およびインターネットプロトコルバージョン 6 (IPv6) アドレス形式のデュアルスタック通信がサポートされています。

デュアルスタック通信をサポートするコンポーネントには、Informatica ドメイン、Informatica Data Quality が使用するアプリケーションサービス、および Developer tool と Analyst ツールが含まれます。

詳細については、『[Statement of Support for IPv6 in Informatica Products](#)』を参照してください。

インストールおよびアップグレード

アップグレードの方法

バージョン 10.5.0.1 は、バージョン 10.5 に適用するサービスパックです。

次の表に、10.5.0.1 でサポートされているアップグレードパスを示します。

使用中のバージョン	サポートされているアップグレードパス
10.0.0～10.1.0	10.4.1 にアップグレードしてから 10.5 にアップグレードし、10.5.0.1 を適用します。
10.1.1～10.4.1	10.5 にアップグレードしてから、10.5.0.1 を適用します。
10.5	10.5.0.1 を適用します。
10.5.0.0.1 および 10.5.0.0.2	10.5.0.1 を適用します。 注: Enterprise Data Catalog 用の Informatica 10.5 累積パッチが利用できません。

サポート EOL ステートメントの詳細については、Informatica グローバルカスタマサポートに問い合わせるか、<https://network.informatica.com/docs/DOC-16182> を参照してください。

アップグレードのための Enterprise Data Catalog の前提条件

Informatica 10.5.0.1 を適用する前に、infacmd ldm BackupContents コマンドでカタログサービスをバックアップします。カタログサービスのバックアップコマンドの詳細については、[Informatica Command Reference](#) ガイドを参照してください。

サービスパックファイル

Informatica は、サービスパックを .tar および .zip 形式で提供しています。サービスパックをダウンロードした後に、ファイルのコンテンツを展開します。Linux および Windows インストール用のサービスパックが用意されています。

サービスパックには次のファイルが含まれています。

Input.properties

Informatica がインストールされるディレクトリを指定したファイル。サービスパックはこのディレクトリにインストールされます。このディレクトリパスでファイルを更新します。また、このファイルには、サービスパックをアンインストールする場合に設定できるロールバックプロパティが含まれています。

install.bat

Windows マシン上の Developer tool 用に指定したディレクトリにサービスパックをインストールします。このファイルは、Windows インストーラに含まれています。

install.sh

Linux マシン上の指定したディレクトリにサービスパックをインストールします。このファイルは、Linux インストーラに含まれています。

サービスパックファイルのダウンロード

1 つ以上のインストーラパッケージをダウンロードして、サービスパックをインストールまたはロールバックします。

サービスパックを適用するには、サービスパックインストーラ、Informatica Developer インストーラ、およびコマンドラインユーティリティパッケージをダウンロードします。

次のいずれかのパッケージをダウンロードします。

- informatica_10501_server_linux-x64.tar
Redhat Enterprise Linux、Ubuntu、SUSE 12、および Amazon Linux 2 インストールのアップデートが含まれます。

Informatica Developer **の次のパッケージをダウンロードします。**

- informatica_10501_client_winem-64t.zip
Developer tool インストールのアップデートが含まれます。

コマンドラインユーティリティの次のいずれかのパッケージをダウンロードします。

- informatica_10501_cmd_utilities_linux-x64.zip
Redhat Enterprise Linux、Ubuntu、SUSE 12、および Amazon Linux 2 インストールのアップデートが含まれます。

Input.properties ファイルの更新

Input.properties ファイルには、Informatica のインストール先を指定するプロパティと、サービスパックインストーラの実行時に行うアクションを定義するプロパティが含まれています。サービスパックのインストールまたはロールバックの前に、これらのプロパティを更新します。ダウンロードしたそれぞれのサービスパックのファイルを更新します。

- サービスパックファイルを展開します。
- サービスパック内の Input.properties ファイルを見つけます。
- ファイルの `DEST_DIR` プロパティを、Informatica ルートディレクトリのパスで更新します。
 - Linux マシンでは、パスを次の形式で設定します。
`DEST_DIR=/home/infauser/<version number>`
 - Windows マシンでは、パスを次の形式で設定します。
`DEST_DIR=C:\\Informatica\\<version number>`
- すべての製品コンポーネントや単体のコンポーネントのサービスパックを適用またはロールバックできます。input.properties ファイルには、各製品コンポーネントの識別子が含まれています。すべてのコンポーネントのサービスパックをインストールするには、各識別子をデフォルト値の **0** に維持します。

サービスパック内の特定のコンポーネントをインストールまたはロールバックするには、次の操作を行います。

- 適用するコンポーネントに関連付けられているコメントタグ（#）を削除します。
- Informatica Data Quality または Data Engineering 製品の場合、`BDM_ONLY` を 1 に設定します。

- Enterprise Data Catalog の場合、EDC_ONLY を 1 に設定します。
- Enterprise Data Preparation の場合、EDP_ONLY を 1 に設定します。

注: Data Privacy Management には、Data Engineering コンポーネントと Enterprise Data Catalog コンポーネントが必要です。Data Privacy Management の場合は、Data Engineering、Enterprise Data Catalog、および Data Privacy Management に関連付けられているコメントタグ（#）を削除して、値を 1 に設定します。

複数の製品がインストールされている場合は、次の順序で個々のコンポーネントを適用します。

1. Data Quality または Data Engineering 製品
2. Enterprise Data Catalog
3. Enterprise Data Preparation
4. Data Privacy Management

サービスパックを適用した後に、インストーラを使用してサービスパックを自動的にロールバックすることはできません。サービスパックをロールバックするには、「[「特定のコンポーネントへのサービスパックのロールバック」 \(ページ 5\)](#)」の節に記載されている手順を実行する必要があります。

5. ファイルを保存し、閉じます。

特定のコンポーネントへのサービスパックのロールバック

すべてのコンポーネントまたは特定のコンポーネントに適用したサービスパックをロールバックすることができます。

詳細スキャナの場合は、サービスパックをインストールする前に、標準のデータベースバックアップ手順を使用して詳細スキャナリポジトリをバックアップします。

注: サービスパックインストーラを使用して、以前のバージョンの詳細スキャナに戻すことはできません。

1. Input.properties ファイルで、ROLLBACK プロパティの値を設定します。サービスパックをロールバックするには、この値を **1** に設定します。

注: サービスパックをインストールする前に、詳細スキャナリポジトリをバックアップしてください。

サービスパックをインストールまたはロールバックするときに、インストーラはデフォルトではすべてのコンポーネントを適用します。

サービスパック内の特定のコンポーネントをインストールまたはロールバックするには、次の手順を実行します。

- 適用するコンポーネントに関連付けられているコメントタグ（#）を削除します。
- Informatica Data Quality または Data Engineering 製品の場合、BDM_ONLY を 1 に設定します。
- Enterprise Data Catalog の場合、EDC_ONLY を 1 に設定します。
- Enterprise Data Preparation の場合、EDP_ONLY を 1 に設定します。

注: Data Privacy Management には、Data Engineering コンポーネントと Enterprise Data Catalog コンポーネントが必要です。Data Privacy Management をロールバックする場合は、Data Engineering、Enterprise Data Catalog、および Data Privacy Management に関連付けられているコメントタグ（#）を削除して、値を 1 に設定します。

複数の製品がインストールされている場合は、次の順序で個々のコンポーネントをロールバックします。

1. Data Privacy Management
 2. Enterprise Data Preparation
 3. Enterprise Data Catalog
 4. Informatica Data Quality または Data Engineering 製品
2. ファイルを保存し、閉じます。

Enterprise Data Catalog のロールバック後のタスク

- カタログ内のアセットの表示に関する問題を解決するには、client_certs ディレクトリを \$INFA_HOME/services/shared/security/<ICSNAME> から削除する必要があります。
- Informatica クラスタサービスおよびカタログサービス用に生成された証明書をバックアップし、サービスを再起動して証明書を再生成する必要があります。証明書は、ノードの次の場所に保存されています。

- <ICS_CUSTOM_DIR>/certs

- \$INFA_HOME/services/shared/security/<Informatica クラスタサービス名>/client_certs

注: <ICS_CUSTOM_DIR>ディレクトリは、Informatica クラスタサービスのクラスタカスタムディレクトリです。デフォルトは /opt/informatica/ics です。

インストーラの実行

インストーラファイルを実行して、サービスパックをインストールします。

前提条件:

Enterprise Data Catalog の場合は、次のコマンドを実行して詳細スキャナサーバーを停止します:

<Infa_Home>/services/CatalogService/AdvancedScannersApplication/app/server.sh stop

1. すべての Informatica アプリケーションを閉じ、すべての Informatica サービスを停止します。
2. サービスパックファイル内でインストーラファイルを見つけて、そのファイルを展開します。
 - Linux システムの場合、インストーラファイルは install.sh です。
 - Windows システムの場合、インストーラファイルは install.bat です。
3. インストーラを実行します。

注: クラスタとクライアントに CA 署名付き証明書を使用する場合は、更新済みの generate_csr.sh スクリプトと generate_certs.sh スクリプトを使用して、証明書署名要求 (CSR) とカスタム SSL 証明書を生成します。スクリプトを含んだ CustomSSLScriptsUtil_ExternalCA.zip ファイルは、Akamai Download Manager からダウンロードできます。詳細については、[Configure custom SSL for Enterprise Data Catalog with external CA-signed certificates using custom SSL scripts KB](#) の記事を参照してください。

インストール後の手順

サービスパックの適用後に、製品に適用するインストール後のタスクを実行します。

アナリストサービスのインストール後の手順

サービスパックをダウンロードして適用した後に、次の手順を実行します。

1. アナリストサービスが実行中でないことを確認します。
2. Informatica のインストール場所から次のディレクトリを削除します。
 - <Informatica ルートディレクトリ>/services/AnalystService/analyst
 - <Informatica ルートディレクトリ>/services/AnalystService/analystTool
 - <Informatica ルートディレクトリ>/services/AnalystService/mappingspec
 - <Informatica ルートディレクトリ>/tomcat/temp/<analyst_service_name>
temp ディレクトリに複数のアナリストサービスディレクトリが含まれている場合、各アナリストサービスのディレクトリを削除します。
3. アナリストサービスを再起動します。
4. すべてのクライアントマシン上のブラウザキャッシュをクリアします。

Data Privacy Management のインストール後のタスク

サービスパックをダウンロードして適用した後に、次のタスクを実行します。

カスタム SSL 証明書のコピー

以前のバージョンから 10.5 にアップグレードしていて、カスタム SSL 証明書を使用する場合は、このタスクを実行します。カスタム証明書を保存するフォルダに certs フォルダを移動します。

1. 次の場所から certs フォルダをコピーします。
<Informatica インストールディレクトリ>/logs/<ノード名>/services/SecureAtSourceService/<Data Privacy Management サービス名>/
2. カスタム SSL 証明書を保存するフォルダに certs フォルダを貼り付けます。
3. 元の場所から certs フォルダを削除します。

Data Privacy Management サービスのアップグレード

Data Privacy Management サービスコンテンツをアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを実行して、Informatica ドメインを起動します。
cd <Informatica installation directory>/tomcat/bin ./infaservice startup
2. Data Privacy Management サービスが無効になっていることを確認します。
3. 他の Informatica サービスがすべて有効になっていることを確認します。
4. Informatica Administrator にログインし、ドメインナビゲータのサービスのリストから Data Privacy Management サービスを選択します。

5. **【アクション】 > 【コンテンツのアップグレード】** をクリックします。

6. Data Privacy Management サービスを有効にします。

サービスコンテンツをアップグレードした後は、10.5 にロールバックすることはできません。

Informatica Discovery Agent のアップグレード

サブジェクトレジストリに非構造化ソースが含まれている場合、またはリモートエージェントを使用して非構造化ソースでドメイン検出を実行する場合は、Informatica Discovery Agent をアップグレードします。

1. 次のコマンドを実行して、既存のリモートエージェントをシャットダウンします。

- Linux

```
cd <Existing remote agent directory>/bin
./siagent.sh shutdown
```

- Windows

```
cd <Existing remote agent directory>\bin
siagent.bat shutdown
```

2. 次の場所からエージェントバイナリを抽出します: <Informatica インストールディレクトリ>/SecureAtSourceService/InformaticaDiscoveryAgent/InformaticaDiscoveryAgent.zip

ファイルをフォルダに抽出します。例: NewRemoteAgent

3. 次のファイルを既存のリモートエージェントフォルダから NewRemoteAgent フォルダにコピーします: <既存のリモートエージェントディレクトリ>/tomcat/conf/server.xml

4. リモートエージェントのキーストアファイルとトラストストアファイルがリモートエージェントディレクトリの外部にあるか、バックアップされており、server.xml ファイルで場所が更新されていることを確認してください。

5. 次のコマンドを実行して、リモートエージェントを開始します。

- Linux

```
cd <NewRemoteAgent>/bin
./siagent.sh startup
```

- Windows

```
cd <NewRemoteAgent>\bin
siagent.bat startup
```

ユーザーアクティビティと異常セキュリティポリシーの再作成

以前に作成された、データドメイン条件を含むユーザーアクティビティおよび異常セキュリティポリシータイプは、演算子に変更されたため、適切に機能しません。

以前の条件演算子は、ユーザーアクティビティおよび異常セキュリティポリシータイプには適用されません。ポリシーには、anyOf、noneOf、および allOff 演算子が必要です。ポリシーを引き続き使用するには、ポリシーを再作成します。以前に作成したポリシーは非アクティブ状態に変更するか、削除します。セキュリティポリシーを削除する前に、セキュリティポリシーに関連するすべての違反を削除する必要があります。

UBA コア RPM の更新

異常検出を実行する場合は、UBA コア RPM を更新する必要があります。

1. COMPLETE モードで Data Privacy Management サービスを無効にし、UBA マネージャが停止したことを確認します。
2. クラスタマシンで、`com.infa.sats.uba.core_10.5-SNAPSHOT-x86_64.rpm` UBA コア RPM をアンインストールします。
3. `com.infa.sats.uba.core_10.5-SNAPSHOT-x86_64.rpm` UBA コア RPM を、Informatica ドメインマシンの次の場所からコピーしてインストールします: `<Informatica インストールディレクトリ>/SecureAtSourceService/spark-components`。
4. マルチノード環境では、クラスタ内のすべてのノードで UBA をアンインストールしてからインストールします。
5. Data Privacy Management サービスを再起動し、UBA マネージャが起動することを確認します。

Python トランスフォーメーションのインストール後の手順

Python トランスフォーメーションを使用するには、インストールまたはアップグレード後に、Hadoop クラスタのワーカーノードに Python のインストールが含まれていることを確認する必要があります。

注: ディレクトリ `<Informatica インストールディレクトリ>/services/shared/spark/python` に Python をインストールしている場合は、Python を再インストールする必要があります。

使用する製品に応じて、異なるタスクを実行します。

Data Engineering Integration への Python のインストール

マッピングで Python トランスフォーメーションを使用するには、クラスタのワーカーノードに、Python の統一されたインストールが含まれている必要があります。インストールは次のいずれかの方法で、統一されているか確認できます。

Python のインストールが存在することを確認します。

クラスタのすべてのワーカーノードの同じディレクトリ (`usr/lib/python` など) に Python のインストールが含まれていること、および必要なすべてのモジュールがそれぞれの Python インストールに含まれていることを確認します。

さらに、Python インストールを格納するディレクトリに基づいて Hadoop 接続の次の Spark 詳細プロパティが構成されていることを確認します。

```
infaspark.pythontx.executorEnv.PYTHONHOME
```

Python をインストールします。

すべてのデータ統合サービスマシンに Python をインストールします。Python コードで参照できる特定のモジュールを含む Python のカスタムインストールを作成できます。マッピングを実行すると、Python インストールがクラスタのワーカーノードにプロパゲートされます。

データ統合サービスマシンに Python をインストールする場合は、次のタスクを完了します。

1. Python をインストールします。
2. 必要に応じて、`numpy`、`scikit-learn`、`cv2` などのサードパーティライブラリをインストールします。Python トランスフォーメーションでサードパーティライブラリにアクセスできます。

3. Python インストールフォルダーをデータ統合サービスマシンの以下の場所にコピーします。

<Informatica installation directory>/services/shared/spark/python

注: データ統合サービスマシンに Python のインストールがすでに含まれている場合は、既存の Python インストールをこの場所にコピーします。

変更は、データ統合サービスを再起動した後に反映されます。

Data Engineering Streaming への Python のインストール

ストリーミングマッピングで Python トランスフォーメーションを使用するには、Python および Jep パッケージをインストールする必要があります。Jep をインストールする必要があるため、使用する Python のバージョンは Jep との互換性が必要です。次のいずれかのバージョンの Python を使用できます。

2.7

3.3

3.4

3.5

3.6

Python および Jep をインストールするには、次のタスクを完了します。

1. **--enable-shared** オプションを使用して Python をインストールして、Jep から共有ライブラリにアクセスできるようにします。
2. Jep をインストールします。Jep をインストールするには、以下のインストールオプションを検討します。
 - `pip install jep` を実行します。Python が pip パッケージとともにインストールされている場合はこのオプションを使用します。
 - Jep バイナリを設定します。jep.jar に Java クラスローダーからアクセスできること、共有 Jep ライブラリに Java からアクセスできること、および Jep Python ファイルに Python からアクセスできることを確認します。
3. 必要に応じて、numpy、scikit-learn、cv2 などのサードパーティライブラリをインストールします。Python トランスフォーメーションでサードパーティライブラリにアクセスできます。
4. Python インストールフォルダーをデータ統合サービスマシンの以下の場所にコピーします。
<Informatica installation directory>/services/shared/spark/python
注: データ統合サービスマシンに Python のインストールがすでに含まれている場合は、既存の Python インストールをこの場所にコピーします。

変更は、データ統合サービスを再起動した後に反映されます。

Enterprise Data Catalog のインストール後の手順

サービスパックをダウンロードして適用した後に、次の手順を実行します。

アプリケーションサービスのアップグレード

10.5.0.1 を適用した後に、Informatica アプリケーションサービスを次の順序でアップグレードする必要があります。

- モデルリポジトリサービス
- データ統合サービス
- コンテンツ管理サービス

SAP Transports for Enterprise Data Catalog のダウンロード

SAP BW、SAP BW/4HANA、および SAP S4/HANA スキャナを実行する前に、互換性のあるバージョンの SAP トランスポートをダウンロードして、SAP サーバーにインポートします。このトランスポートは、Informatica のインストールサイトからダウンロードした SAP_Scanner_Binaries.zip ファイルに含まれています。

詳細スキャナの設定

詳細スキャナを設定する前に、次のアクションを実行します。

詳細スキャナを 10.5.0.1 で初めてインストールする場合、またはインストールを終了した後に 10.5 インストーラの .tar ファイルを削除した場合は、次のアクションを実行します。

1. Akamai Download Manager から、Enterprise Data Catalog バージョン 10.5 をダウンロードします。
2. 次の場所からインストール後のスクリプトを抽出します: \properties\AdvScanner\
3. Enterprise Data Catalog と詳細スキャナとの関連付け「バージョン 10.4.0 以降からのアップグレード」にある「詳細スキャナ」を参照してください。
4. 詳細スキャナを設定します。「バージョン 10.4.0 以降からのアップグレード」にある「詳細スキャナ」を参照してください。

詳細スキャナがすでにインストールされている場合は、次のアクションを実行します。

1. Enterprise Data Catalog と詳細スキャナとの関連付け「バージョン 10.4.0 以降からのアップグレード」にある「詳細スキャナ」を参照してください。
2. 詳細スキャナを設定します。「バージョン 10.4.0 以降からのアップグレード」にある「詳細スキャナ」を参照してください。

カスタム SSL 証明書の再生成

カスタム SSL 証明書の生成でエラーが発生した場合は、証明書を再生成することをお勧めします。CustomSSLScriptsUtil_ExternalCA または GenerateCustomSslUtility ユーティリティを使用してカスタム SSL 証明書を再生成した場合は、次の手順を実行します。

- Administrator ツールまたは infacmd.sh ics shutdownCluster コマンドを使用してクラスタをシャットダウンします。
- Informatica クラスタサービスを再起動します。
- カタログサービスを再起動します。

10.5.0.1 に統合された緊急バグ修正

Informatica では、以前のリリースの緊急バグ修正（EBF）をバージョン 10.5.0.1 に統合しました。これらの EBF では、以前のリリースで見つかった問題に対する修正を提供しています。

バージョン 10.5.0.1 に統合された EBF の一覧については、次の Informatica Knowledge Base の記事を参照してください：

<https://knowledge.informatica.com/s/article/FAQ-What-are-the-Emergency-Bug-Fixes-EBFs-that-are-merged-into-Informatica-10-5-0-1>

10.5.0.1 の修正された問題と実装された拡張要求

Data Engineering 修正された問題（10.5.0.1）

以下の表に、修正済みの問題を示します。

問題	説明
BDM-38139	Spark エンジンで実行したマッピングで ORC テーブルの ZLIB 圧縮を明示的に設定すると、Spark ワークフローで、マッピングが失敗する原因となる追加の実行ステップが生成される。
BDM-37934	Spark モードで複合ファイルソースにマッピングを実行すると、次の両方の条件に当てはまる場合に、マッピングでターゲットファイルにデータが書き込まれない。 <ul style="list-style-type: none">- クラスターの Hadoop ディストリビューションが Cloudera CDH バージョン 6.3.4 である。- 複合ファイルソースに、バイナリまたはカスタム入力ファイル形式がある。
BDM-37438	Spark エンジンで 24 時間以上マッピングを実行すると、委任トークンエラーで失敗する。この問題は、Cloudera CDH バージョン 6.3 のクラスターで発生します。
BDM-37351	INSET、UPDATE、または DELETE のいずれかの操作を実行するアップデートストラテジトランスフォーメーションを含んだマッピングを Spark エンジンが実行し、重複する行がソースに含まれている場合に、「Merge ステートメントのカーディナリティ違反」エラーでマッピングが失敗する。
BDM-36357	Enterprise Data Catalog で設定されたリソースを使用してエンタープライズ検出プロファイルジョブを実行すると、pmdtmsvc2 DTM プロセスが断続的にシャットダウンする。DTM のシャットダウンによって、DTM で実行されるマッピングの状態に矛盾が生じます。

Data Privacy Management 修正された問題（10.5.0.1）

以下の表に、修正済みの問題を示します。

問題	説明
SATS-40426	PostgreSQL データベース上に Data Privacy Management リポジトリを作成する場合に、セキュリティポリシーを作成できない。

ドメインの修正された問題(10.5.0.1)

以下の表に、修正済みの問題を示します。

問題	説明
BDM-37822	Analyst ツールを使用してオペレーティングシステムプロファイルを使用してフラットファイルをアップロードすると、ANSI または拡張 ASCII 文字セットでエンコードされた一部の文字が破損する可能性がある。

Enterprise Data Catalog の修正された問題（10.5.0.1）

以下の表に、修正済みの問題を示します。

バグ	説明
MDX-22521	バージョン 10.5.0.1 から、 【接続レジストリパス】 パラメータがオプションになっている。
MDX-21760	詳細スキャナツールで、接続レジストリのエントリを追加および編集できてしまう。これらの操作を実行する場合、 【詳細設定】 プロパティでは次のオプションがサポートされていないため、選択することはできません。 <ul style="list-style-type: none">- edc.resourceNameSchemaMapping- edc.fileConnectionMode- edc.linkingMode- edc.resourceName
MDX-20997	接続が自動で割り当てられた場合、接続の割り当てが進行中であっても、詳細スキャナに 【完了】 というステータスが表示される。
MDX-20925	Snowflake リソースにデータベースをまたがるビューが含まれている場合、そのビューが、リソースの 【概要】 ページに未解決のビューとして表示される。ビューのシステム属性に次のエラーメッセージが表示されます: エラー: 不明なテーブル: [SNOWFLAKE]。
EIC-55086	PowerCenter リソースから.xmi ファイルを処理すると、スキャンが失敗して、次のエラーメッセージが表示される。 java.lang.ClassCastException: MITI.sdk.MIRDiDesignContent cannot be cast to MITI.sdk.MIRStoreContent
EIC-55084	IBM Congos スキャナ設定を実行している場合、 【メタデータのロード設定】 タブで 【選択】 をクリックするとポップアップウィンドウが非常にゆっくりと表示される。
EIC-55052	自動割り当て接続が、Expected status code: 200 found 500 というエラーで失敗する。
EIC-55042	自動割り当てされた接続を使用した接続割り当てが、NullPointerException エラーで失敗する。
EIC-54974	Snowflake スキャナが NullPointerException 例外で失敗する。
EIC-54951	Amazon S3 リソースで、第 1 レベルのディレクトリで正規表現構文が機能しない。
EIC-54938	Informatica Intelligent Cloud Services の実行中に、マッピングタスクに SQL コメントを含んだ SQL オーバーライドクエリが含まれている場合、リネージュで問題が発生する。
EIC-54921	参照データ型のカスタム属性でアセットのエンリッチメントを実行すると、一括エクスポートが失敗する。

バグ	説明
EIC-54914	管理者以外のユーザーとして Enterprise Data Catalog にログインすると、Data Quality リソースが失敗する。
EIC-54825	マルチノード設定で、mergeContents コマンドが"接続が拒否されました"というエラーメッセージで失敗する。
EIC-54125	リポジトリデータベースに接続している Microsoft SQL Server 統合サービスをロードすると、スキャナが StackOverflow エラーで失敗する。
EIC-54119	Enterprise Data Catalog に、BTO データモデルアプリケーションに対するマッピングトランスフォーメーションのデータ変換アイコンと式が表示されない。
EIC-54115	Informatica クラスタ検証ユーティリティで、ゲートウェイホスト、データノード、および処理ノードに指定した完全修飾ドメイン名が検証されない。
EIC-54103	LDAP ユーザーとして Enterprise Data Catalog にログインしてリソースを実行するか [分析] タブをクリックした場合、ログファイルに UserNotFoundException エラーが表示される。
EIC-54031	データノードに複数のネットワークインタフェースがある場合、Nomad でデフォルトのネットワークインタフェースが識別されない。
EIC-53660	Amazon Web Services Glue スキャナが無期限に実行される。スキャナコンテナを中止すると、ステータスコード 400 および 504 エラーがスキャナログに記録される。
EIC-53658	Enterprise Data Catalog で、Oracle Scanner に対する MDM パッケージのデータリネージュを表示できない。
EIC-53410	マルチノードクラスタで Enterprise Data Catalog バージョン 10.5 にアップグレードした後にリソースを再実行すると、データソースにオブジェクト ID の変更が含まれている場合、重複するオブジェクトがカタログに表示される。
EIC-53403	Informatica クラスタサービスを使用してサービスを開始すると、MongoDB サービスと Nomad サービスが失敗し、サービスに対する権限エラーがログに表示される。
EIC-53376	Apache Solr サービスが SSL 対応である場合に、Apache Solr UI にコレクション情報が表示されない。
EIC-53347	Enterprise Data Catalog バージョン 10.5 でリソースを再度実行すると、Tableau リソース用に設定されたエンリッチメントが失われる。
EIC-53323	SSLHandshakeException エラーでカタログのバックアップが失敗したときに、エラーの原因となったファイルの詳細が表示されない。
EIC-53321	REST API を使用したカタログのバックアップが次のエラーで失敗する: org.apache.http.conn.HttpHostConnectException: Connect to.
EIC-53253	参照オブジェクトを Data Quality リソースから.csv ファイルにエクスポートすると、エクスポートした参照オブジェクトが.csv ファイルに表示されない。
EIC-53239	マルチノードのデプロイメントでカタログサービスを有効にすると、サービスに次のエラーが表示される: カatalogサービスに接続するための有効な証明書が見つかりません。このエラーは、Informatica ドメインをホストするノードで Informatica クラスタサービスを設定し、別のノードでカタログサービスを設定した場合に発生します。
EIC-53232	マルチノードドメイン環境で Informatica クラスタサービスを有効化できない。

バグ	説明
EIC-53226	SSL に対してサービスが有効になっているマルチノードデプロイメントで、LDM の mergeContents コマンドが失敗する。
EIC-53138	カスタム SSL 証明書を使用すると MongoDB サービスが失敗し、次のエラーが発生する: SSL ピア証明書の検証に失敗しました: パスの長さの制約を超えました。サービスの検証では、カスタム SSL 証明書のパス長がゼロ以外の値であるかどうかは検証されません。
EIC-53077	ネイティブの Snowflake リソースと比較した場合に、Enterprise Data Catalog で高度な Snowflake リソースに対する誤ったソースデータ型が表示される。
EIC-53022	リソースに設定されている大文字と小文字の区別を変更すると、リソースをパージせずにリソースを再実行できてしまう。
EIC-52995	カタログサービスで、infa_truststore.pem ファイルがカスタム SSL ディレクトリに存在するかどうかの検証が実行されない。
EIC-52706	検索結果ページで結果を表示するときに、ページネーション制御を使用して別のページに移動してからリソース名フィルタを適用すると、結果が表示されない。
EIC-52288	Safari ブラウザを使用して Enterprise Data Catalog にアクセスし、カラムの概要のウォークスルーを起動すると、ステップを表示してフローを進めることができない。
EIC-51835	【ビジネス用語関連付け】 設定で、255 文字を超える名前を持った用語集を選択してからリソースを実行すると、リソースのビジネス用語の関連付けタスクが失敗し、ログファイルに次のメッセージが表示される: java.util.concurrent.ExecutionException: java.lang.IllegalArgumentException。
EIC-51258	Azure MySQL リソースでプロファイルを実行すると、Enterprise Data Catalog が varchar(500)データ型のカラムのプロファイリングに失敗する。
EIC-50430	モデルの不整合によってデータオブジェクトが Enterprise Data Catalog にロードされなかった場合でも、詳細スキャナのログにエラーが報告されない。
EIC-49515	SAP BW スキャナが、Shielded InfoSource アセットのリネージュを抽出しない。
EIC-48446	X.509 ロールベースの認証が、MongoDB サービスでサポートされない。
EIC-48256	検索結果ページから 200000 を超えるアセットをエクスポートすることができない。
EIC-46477	TLS 1.2 プロトコルを使用した Oracle リソースへのセキュアな接続が、接続リセットエラーで失敗する。
DAA-2363	リソースをパージした後に Data Asset Analytics からアセットエンリッチメントレポートを作成すると、削除されたエンリッチメントに関する詳細がレポートに表示されない。
DAA-2362	リソースを複数回スキャンしてパージし、アセットへのリネージュを作成すると、[データアセットエンリッチメント] タブの [リネージュと影響を含むデータアセット (%)] キーメトリックに 100%を超える値が表示される。
EIC-55279	Enterprise Data Catalog バージョン 10.5.0.1 にアップグレードした後に、リソースとアセットに割り当てられたカスタム属性を表示することができない。

バグ	説明
EIC-54747	リソースレベルでアセットをフォローしてソース変更フィルタを【通知】ページに適用すると、このページにすべてのタイプのアセットの変更が表示される。
EIC-54011	データオブジェクトレベルでアセットをフォローすると、【通知】ページにソースの変更が表示されない。

Enterprise Data Preparation の修正された問題（10.5.0.1）

以下の表に、修正済みの問題を示します。

バグ	説明
IDL-18291	データの準備中にデータをアップロードするときに、アップロードボタンが使用できない。
IDL-18304	ワークシートの NULL カラムでクラスタおよび分類操作を使用すると、パブリッシュ処理が R2M エラーで失敗する。
IDL-18327	さまざまな値を含む電子メール ID カラムからドメイン名を抽出すると、パブリッシュ処理が失敗し、次のエラーが発生する。 Failed in the internal component of recipe to mapping.

10.5.0.1 の既知の問題

この節では、10.5.0.1 で見つかった既知の問題を示します。

Data Engineering 既知の問題（10.5.0.1）

次の表に、既知の問題を示します。

バグ	説明
BDM-38145	MAP_KEYS 関数を使用してキーの配列を SQL オーバーライドの結合条件に渡すと、マッピングが失敗する。 回避策: MAP_KEYS 関数を使用せずに、キーの配列を結合条件に渡します。
BDM-38082	ソースまたはターゲットとしてブロックチェーンデータオブジェクトを含むマッピングが、次のエラーで失敗する。 Caused by: java.lang.IllegalArgumentException: Wrong FS: <HDFS location>, expected: file:///
BDM-37909	7.2.1 より前のバージョンの Cloudera CDP クラスタで Spark モードでマッピングを実行すると、マッピングが次のエラーで失敗する: SEVERE: 統合サービスが Hive タスクを実行できませんでした 回避策: Cloudera CDP バージョン 7.2.1 以前を使用します。

バグ	説明
IIS-5558	Databricks クラスタで Azure Kafka のソースとターゲットを使用してストリーミングマッピングを実行すると、次の条件が当てはまる場合に、マッピングが <code>jep module not found exception</code> というエラーで失敗する。 <ul style="list-style-type: none"> - マッピングに Python トランスフォーマーが含まれている。 - Python トランスフォーマーのリソースファイルが、ユーザー定義の外部モジュールに設定されている。
ISD-2340	CSV、XML、または JSON サンプルファイルに基づくインテリジェント構造モデルを使用したマッピングの実行が Databricks 7.3 で失敗し、次のエラーが発生する。 ERROR Uncaught throwable from user code: java.lang.NoClassDefFoundError: com/informatica/adaptor/parser/atlantic/AtlanticDataFrameGenerator

Data Privacy Management 既知の問題（10.5.0.1）

次の表に、既知の問題を示します。

バグ	説明
SATS-40931	リソースでスキャンを実行し、Enterprise Data Catalog でデータドメインの割り当てを拒否した場合に、カタログリソースをインポートすることができない。インポートは制約違反エラーで失敗します。
SATS-40929	Enterprise Data Catalog からファイルシステムリソースタイプをインポートすると、リソースにパス値が含まれない。
SATS-40788	JDBC データストアをインポートすると、データストアに JDBC ドライバクラス名が含まれない。
SATS-40745	Active Directory データストアをインポートすると、データストアに JDBC ドライバクラス名が含まれない。

Enterprise Data Catalog の既知の問題（10.5.0.1）

次の表に、既知の問題を示します。

バグ	説明
MDX-22679	Power BI の実行時に、存在しないワークスペースを指定した場合のエラーが詳細スキャナ処理ログに表示されない。
MDX-22673	Greenplum データベースで、詳細スキャナが配列の解析に失敗する。次のエラーメッセージが表示されます。 ERROR ERROR Failed to analyze statement. Parse error (InputMismatch) on token: '['. Line.column: 5.21, Text: [>[<2] =]<SQL>CREATE FUNCTION edc_advscan_gp.gp_a_q_p_array_update() RETURNS int4 AS \$metadex\$ BEGIN UPDATE GP_A_Q_SQL SET PAY_BY_QUARTER [2] = (SELECT ITEM_IN_ID FROM GP_A_Q_ITEM_IN); RETURN 0;END; \$metadex\$ language PLPGSQL;</SQL>

バグ	説明
MDX-22624	<p>詳細スキャナが、PowerBI Cloud から JSON、XML、および PDF ファイルタイプを読み取ることができない。詳細スキャナログは、次のエラーを返します。</p> <p>Could not resolve expression due to following exception. Will create emergency lineage using expected columns. com.compactsolutionsllc.cdmc.powerquery.obj.env.PowerQueryException: Unable to evaluate PowerQuery expression. Unknown object: Table.ExpandRecordColumn Call stack: Changed Type, Expanded Employee</p>
MDX-22518	Greenplum データベースで、別の関数から呼び出されたときに詳細スキャナが関数を読み取ることができない。ネストされた関数呼び出しを分析することはできません。
MDX-22447	PowerBI スキャンを実行すると、詳細スキャナが、ファイルパスにある元の大文字と小文字ではなく、小文字ですべての接続を抽出する。
MDX-22417	詳細スキャナリポジトリに、Oracle ODI ビジューライゼーションにリネージュが表示されない。
MDX-22039	詳細スキャナに、Microsoft Power BI オブジェクトに必要な属性が表示されない。
MDX-22027	Microsoft Power BI 設定で、詳細スキャナに WebService と WebExample の間のリネージュが表示されない。
MDX-22024	詳細スキャナの【リネージュと影響】タブで、Windows PowerBI ダッシュボードアセットを展開できない。
MDX-22008	詳細スキャナで、Microsoft PowerBI に対して「Exclude:Workspace:Report」フィルタを使用すると、ワークスペース全体が除外される。
MDX-22001	詳細スキャナに、リネージュ内の世代別データグループ (GDG) のバージョンが一覧表示されない。たとえば、JCL でファイルを読み出す場合は、以前のバージョン番号 (+1) ではなく、ファイル名だけを使用します。
MDX-21901	詳細スキャナに、Web DataSet を使用した Windows PowerBI 設定の実行に対して不適切なリネージュが表示される。
MDX-21645	詳細スキャナで、Talend 設定を実行すると、式ロジックで作成されたカラム値を持つ設定に計算アイコンが表示される。
MDX-20661	詳細スキャナで、5000 のストアプロシージャを使用して Oracle スキャナを実行すると、メモリフットプリントが非常に大きくなる。
EIC-55555	<p>infacmd ldm restoreContents コマンドが次のエラーで失敗する: [[BackupRestoreClient_20016] データのリストアに使用される ZIP ファイル/data1/Informatica/LDM1050/Backup.zip は、バックアップストアのデータバックアップ ZIP ファイルではありません。]</p> <p>回避策: 次の手順を実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. .zip ファイルをバックアップします。 2. 次のコマンドを実行します: zip -d <バックアップ zip ファイル名> "Meta_INF/metainfo.properties" 3. infacmd ldm restoreContents コマンドを使用してリストア操作を実行します。
EIC-55364	<p>Informatica ドメインで SSL が有効で、カタログサービスノードと Informatica クラスターサービスゲートウェイホストの間にパスワードレス SSH 接続が設定されていない場合、カタログサービスを有効にしたときにクライアント証明書が正しく生成されない。</p> <p>回避策: カatalogサービスノードと Informatica クラスターサービスゲートウェイホスト間のパスワードレス SSH 接続を設定します。</p>

バグ	説明
EIC-55297	英語以外の言語設定で構成されたブラウザを使用して Catalog Administrator にアクセスすると、次のウォークスルーが起動しない。 <ul style="list-style-type: none"> - リソースの作成 - カスタム属性の作成 - データドメインの作成 - セキュリティと権限の管理
EIC-55285	設定した-DcustomScannerMaxFileSize JVM オプション値がデフォルト値よりも大きい場合、カスタムメタデータおよびカスタムリネージュリソースが失敗する。
EIC-55212	Enterprise Data Catalog でオフラインリソースのアセットを開くことができない。
EIC-54872	メモリ構成を [中] に設定した場合、SAP S4/HANA のフルスキャンが OutOfMemory 例外で失敗する。
EIC-54104	HDI SPARK クラスタで、ストレージタイプとして WASB を選択すると、HDFS スキャナのテスト接続が失敗する。
MDX-21904	Microsoft Power BI で、詳細スキャナが ADLS Gen2 への接続をサポートしていない。
MDX-22714	Microsoft Power BI で、詳細スキャナが ODBC Oracle への接続をサポートしていない。
EIC-55534	カスタムリソースのデータドメインを承認または拒否することができない。
EIC-55375	クラシックビューからコンパクトリネージュビューに移動すると、ビューでテーブル名をクリックした後に、[リネージュと影響] タブのロードが失敗する。
EIC-55030	10.5.0.1 を適用した場合、またはバージョン 10.5 から 10.5.0.1 にロールバックした場合に、10.5.0.1 インストーラのログファイルに次のエラーメッセージが表示される。 Cannot perform the backup operation because the following file does not exist: /data/Informatica/LDM1050//services/RevService/rude/lib/ com.infa.products.repository.prs.common.interface-10.5.0.64.523-SNAPSHOT.jar
MDX-22757	レポートが Teradata に接続すると、Microsoft Power BI の実行が失敗する。
MDX-22593	Microsoft Power BI で、PowerQuery 内にマージされたクエリ操作を含むデータセットを使用すると、ソースに対するリネージュを表示できない。ログには次の警告が表示されます: Unable to evaluate PowerQuery expression.Unknown object: QueryName Call stack: Merged Queries, QueryName
MDX-22732	Microsoft Power BI で、レポート用に抽出したカラムを Enterprise Data Catalog に表示できない。

サードパーティ製品に関する既知の問題（10.5.0.1）

以下の表に、サードパーティの既知の問題を示します。

バグ	説明
BDM-37988	<p>Blaze エンジンが MapR 6.1 クラスタでマッピングを実行している場合、Hive に保存された Avro 形式のファイルからの読み取りまたは書き込みを行うと、マッピングが失敗する。マッピングが失敗して、次のエラーが表示されます：</p> <p>[GRIDDTM_1016] The Integration Service failed to execute grid mapping with following error [An internal exception occurred with message: java.lang.RuntimeException: Failure to execute Query <query> on the hive Server.]</p> <p>MapR チケット番号: 00101221</p>

Informatica グローバルカスタマサポート

グローバルカスタマサポートにお問い合わせいただく場合は、電話または Informatica Network からご連絡ください。

それぞれの地域の Informatica グローバルカスタマサポートの電話番号については、Informatica Web サイト

(<https://www.informatica.com/services-and-training/customer-success-services/contact-us.html>) を参照してください。

Informatica Network のオンラインサポートリソースについては、<https://network.informatica.com> の eSupport オプションをご確認ください。